

風 来た 風

JCA 千歳船橋

創立 30 周年記念会報



2014 年（平成 26 年）1 月

目 次

(敬称 略)

JCA の歩み

- | | | |
|--------------------------|------------------|---|
| 1. 挨拶 | 当年度会長：井上 宏一 | 2 |
| | JCA 創立メンバー：水野 知子 | 3 |
| | JCA 玉川会長：聖成 美智子 | |
| 2. JCA の変遷 | 会員：中川 英男 | 4 |
| 3. JCA の足跡 (10 年間の活動の記録) | | 6 |
| 4. これからの展望と課題 | 2012 年度会長：宇野 公容 | 8 |

教室の今

- | | | |
|-----------------------------|---------------------------|----|
| 1. 各クラスの皆様 (集合写真) とクラス紹介 | | 10 |
| 2. 長くご活躍の方々の思い出 | | 13 |
| 月曜日クラス | 高崎 洋 芹澤 泉 家木 範子 | |
| 火曜日クラス | 土田 和子 山口 美沙子 | |
| 水曜日(昼)クラス | 浅野 由紀子 種橋 淑子 | |
| 水曜日(夜)クラス | 山内 章次 | |
| 木曜日(昼)クラス | 長野 一美 星野 知子 | |
| 木曜日(夜)クラス | 外山 高志 林 繁樹 | |
| 金曜日(昼)クラス | 村岡 精一 木村 徳子 | |
| 金曜日(夜)クラス | 西 敬史 井上 昇 | |
| 3. JCA 千歳船橋教室案内 (2013 年度現在) | | 22 |

編集後記

JCA 千歳船橋創立 30 周年を迎えて

2013 年度 JCA 千歳船橋会長

井上 宏一

1983 年 9 月に設立された JCA が今年 30 周年を迎えました。記念すべきこの節目の年に会長として巡り合えたことは、誠に嬉しく誇りに思っております。

10 年前の創立 20 周年の記念号を拝見しますと、JCA 設立当時はたった 4 名の方による、異文化の中で不自由な生活をされている外国人への「生活のアドバイス」から始まったとあります。それが今では JCA 千歳船橋だけでも 8 クラス、会員数約 130 名もの規模にまで成長しました。先人らが築き上げてこられたご苦勞、ご熱意、ご努力にはただただ頭が下がる思いであります。

JCA で勉強された学習者の数もこの 30 年間では膨大な人数になると思われませんが、我々の学習は単なる日本語学校の語学授業とは異なり、四季折々の日本の文化、風習、言語と多岐にわたって指導また支援をしております。この点は、机上の日本語学習のみに捕らわれない設立当初の考え方が基本に残っているからと考えております。JCA に関わった学習者がここで教わったことを少しでも活かして、日本の良き理解者として世界に向けて飛び立って行ってくださることを願ってやみません。

この 30 周年を契機に、JCA 千歳船橋が今後さらに飛躍していくよう頑張っ参りたいと存じます。



JCA への思い

トッテンー水野 知子

たった4人の主婦が立ち上げたボランティア団体「JCA」が30周年を迎えられた事、驚きと共に本当に嬉しく思います。当時は、和気あいあいの雰囲気の中、身近な国際交流の場としてそれなりに楽しくやっていたのですが、年を重ねるにつれ学習者もボランティアも増え続けました。私が会長をしていた頃は、日本語だけを教えていけばいいんだという様な考えの方も入ってきました。そして、そもそもボランティア精神とは一体どんなものなのかという根本的な議論になり、会議はいつも喧々囂々でした。

そんな中、平成4年には世田谷南ローターリークラブより、12年にわたる活動に対して感謝状を頂いたりもしました。6～7年前、私事ではありますが母の介護と孫の世話が重なり、皆様に迷惑をかけてはいけないとの思いでやむなく活動を中止しました。

ボランティアの募集や教室の場所確保、学習者の難しい相談事など色々な困難を乗り越えて、当時の活動理念である外国人の日本語学習を支援し、お互いの国の文化への理解を深めるという精神が、今も脈々と受け継がれている事に感謝したい気持ちでいっぱいです。私にとって、JCAでのボランティア活動は生き甲斐にもなっていたと確信しています。

これから40周年、50周年と続いていく姿を、ワクワクしながら見守っていきたいと思っております。

JCA 千歳船橋 30周年に寄せて

JCA 玉川会長 聖成 美智子

11月9日の「JCA 千歳船橋にほんごおしゃべりひろば」にお招き頂きましてありがとうございます。翌日の11月10日にはJCA 玉川のおしゃべり広場が開催されました。

1983年、千歳船橋のボランティアセンターを借りて4人の主婦たちの手によって産声をあげたJCAは、今年30周年を迎えられました。おめでとうございます。開設当時は手のひらサイズで家庭的であったJCAは、現在大きな団体となって運営されています。ここまで築き上げられましたのも、歴代の会長副会長の尽力、会員の皆様の協力、惜しまない努力があつてこそでしょう。

2003年、規模の拡大によりJCA 千歳船橋とJCA 玉川に分かれ姉妹グループとして活動し、年2回双方の会長副会長が集まり、連絡会を持ち現状報告をして交流を計っています。時代の変化と共に、来日する外国人も日本語を教える会員も考え方や生活スタイルが変わっていくことは自然の流れですが、会員が寄り添い話し合うことでさらに新しい考えや発想が生まれることでしょう。

日本の文化を伝える、正月行事や四季折々の催し、最近では区の文化・国際課国際担当の荒井様の尽力により、外国人対象の防災教室も実施され新たな一頁も加わっています。世田谷の西と南に拠点を持つ「JCA 千歳船橋」と「JCA 玉川」は、社会の変遷の中にあってもスタート時点の主旨と精神を守り、手をつなぎ交流の輪を広げたいと願っています。JCA 千歳船橋の30周年、ますますの発展を祈り心よりお祝いを申し上げます。

JCA について

中川 英男 (会員)

皆様こんにちは。今日は JCA 千歳船橋について少々お話しを申し上げたいと思います。

最初に JCA とはということからですが、読んで字のごとく、ジャパンカルチャーアソシエーション、あえて訳せば日本文化協会です。さらに千歳船橋がつきます。

まずは、千歳船橋という名前から話を始めます。今から丁度 30 年前です。

当時千歳船橋、経堂地区に住んでいた 4 人の英語を習っている仲間が、子供に手がかからなくなったのを機会に、何か人のためになることを始めたいと考えました。幸いにも当時千歳船橋に世田谷ボランティアセンターがあり、たまたま事務局長と知り合いだったので、何かボランティア活動をしたいのだがと相談に行った所、日本語ボランティアを勧められやることになった、これが JCA 千歳船橋の始まりです。発祥の地が千歳船橋だからです。

昭和 58 年ごろと言えば、未だボランティア活動などと言う言葉もあまり聞かなかった時代です。そんな訳で最初は何をやるかということになり、どこの病院に行けばいいか？こんなものがほしいけどどこで安く買えるか？こんな人を探しているが、どうやってさがすの？テニスをしたいけど、プールに行きたいけど？ そういう生活レベルの援助が最初の活動でした。でも、一番大切なのはコミュニケーションだと気づき、「必要最小限の言葉は勉強してもらわない」と思い日本語を教えるようになったということです。

昭和 58 年という時代はどんな時代だったかを少し考えてみましょう。

為替レートは当時何と 250~260 円と今では考えられないような円安でした。さらに当時の世の中を調べてみると、今はどこにでもあるスーパーマーケットは世田谷区内には殆どありませんでした。出店規制が厳しく、都市部ではなかなか開店できませんでした。スーパーがない時代を思い起こして下さい。言葉の不自由な方が肉屋、八百屋、果物屋、文房具、日用雑貨から寝具に至るまで各商店を回らなければ買えませんでした。相当不自由したことは想像に難くありません。そこに JCA の活躍の余地があったわけです。

では当時外国人はどのくらい住んでいたかと言いますと、日本全体で 80 万人位です。

日本経済発展に伴って外国人は毎年増え続け、7 年後の 90 年には 120 万人、96 年 140 万人、2005 年には 200 万人と言うように増え続けています。

85 年の統計を見ると 85 万人の外国人内訳はアジア人 79 万人、ヨーロッパ人 1 万 9 千人、北アメリカ人 3 万 2 千人で中南米、アフリカ人は皆無に近い数字です。

さて、そんな中設立 5 年後 JCA は日本語教授法勉強会を初めて開催しています、またボランティアセンターの補助金を受けて初めてパンフレットを作成しました。

それまで学習者不足で頭を悩ませ、増員対策に試行錯誤を繰り返していましたが、このパンフレットを区役所外国人登録窓口に置かせて頂くことにより学習者が増えました。

設立 5 年後にはバブル経済が始まっていて日本に来る外国人が急増したことも要因ですが、ここで留学生についても触れておきますと、1983 年設立当時は日本がまだ今日ほどの経済発展をしていなかったことやアジア諸国も未発展だったこともあり、留学生は 1 万人強です。現在 14 万人いること考えると隔世の感があります。

本題に戻ります。これ以降は増え続ける学習者対策として、毎年のようにクラスの増設を重ね、一部教室の移転等もありましたが今日の8クラス制となりました。その間に諸般の事情で、世田谷ボランティアセンターは千歳船橋から下北沢そして現在の三軒茶屋へと移動を重ねてきました。創立20周年には学習者の増加と遠方からの通学者の対応策として玉川を千歳船橋から分離しJCA玉川が独立しました。玉川とは発祥が同根でありますので未だ幹部同士は姉妹関係として交流は続けていますし、おしゃべり広場等はお互い招待し合ってもいます。

JCAは当初買い物を始めとする相談ごとから始まり、同時に日本文化を知ってもらい理解を深めることに進んで行きました。授業が終わった後も皆で食事に行ったり、季節ごとの日本伝統行事、正月、桃の節句、花見、子供の日、七夕等々季節ごとの行事には家庭に呼んだりしていたようです。また区役所がバスをチャーターして旅行会を行い、世田谷区内や都内の施設や公園に行っていました。そして日本語教育です、当初あまり重きを置いていなかったのですが、その重要性に気付き、設立5年後に外部から講師を呼んで日本語教授法勉強会をやりだしました。やがて、日本語を教えることがメインとなり、日本語能力試験を受けるために入ってくる方も増えてきました。

当JCAとしましては、1) 設立当初からの考えとして、生活上の支援＝学習者が、役所へ届け出る書類や子供の学校からの案内文書等を正しく理解できるように手伝ったり、日常生活で(趣味、買い物、医者、旅行等)困ったことがある時には出来るだけの範囲で相談に乗ったりして彼らを支援するように努めています。

2) 次に親睦と国際文化の交流です。毎年千歳船橋も玉川も学習者と会員の交流会を開き、学習者による日本語スピーチで日頃の成果を発表し、ゲーム、食事などを通して、楽しく親睦を深めています。また、季節行事が行われる時期には、教室ごとにティーパーティを開いて日本の行事、遊び、習慣(例 ひな祭り、花見、七夕)などを紹介したりして相互の理解と交流に努めています。

3) そして日本語の授業です。一部の方には日本語の授業が総てだと思っている方もいるようですが、今はこれがメインですがすべてではありません。

私の話したかったのは先ずはこの3本柱がJCAの根幹ですよ、という事です。

以上がJCA全般についての話です。ご理解の上活動なさってください。

*編集担当より

この文は、日本語講習会の折、中川さん(月曜クラス)が新入会員の為にJCAの歴史や心構えなどをお話しくださった内容の抜粋です。



JCA 千歳船橋 この10年間の足跡

(JCAは、創立20周年の2003年に、「JCA千歳船橋」と「JCA玉川」の二つに発展的に分かれて今に至っています。)

22期(2004年度):村岡 精一(会長)・土田 和子(副会長)

- ◇ 入会希望者(会員)との面接用資料の充実化(セルフチェックシート、面接者マニュアル等の見直しや新規作成など)
- ◇ 日本語教え方講習会を5月と6月に4回シリーズで開催(JCA玉川と共催)
- ◇ おしゃべり広場開催(砧区民会館にて)113名参加
- ◇ 前年に引き続き「世田谷ボランティア協会を支える会」の団体会員として協力。(次年度以降も、団体会員として継続)

23期(2005年度):松山 雄三・村岡 精一

- ◇ 外国人生活支援パンフレットを作成し全教室に配付
- ◇ 日本語教え方講習会を5月と6月に4回シリーズで開催(JCA玉川と共催)
- ◇ おしゃべり広場開催(砧区民会館にて)99名参加

24期(2006年度):高崎 洋・後藤 暁

- ◇ 総会にて会則の一部を変更
- ◇ 会員、学習者数の減少歯止め策の一つとしてJCA教室案内チラシの地図を重点に学習希望者にわかりやすく改定し、区役所他に配置
- ◇ 世田谷区の社会教育関係の保険が廃止となったため、東京都社会福祉協議会の「ボランティア保険」に入るべく審議し、希望者は個人で加入することとした
- ◇ 日本語教え方講習会を5月と6月に4回シリーズで開催(JCA玉川と共催)
講師陣を変更(従来 横浜国大の先生 → 「にほんごの会」)
- ◇ 会員募集広告を区報(広報せたがや)に掲載した結果、多数の応募があり会員が大幅に増加
- ◇ おしゃべり広場開催(砧区民会館にて)

25期(2007年度):後藤 暁・上野 一海

- ◇ JCA千歳船橋の活動広報パンフレット「JCAにほんご」を作成
- ◇ 外国人向けの災害発生時対応パンフレット(世田谷区作成)を学習者に配布
- ◇ 東京都外国人支援団体に入会
- ◇ 日本語教え方講習会を5月と6月に4回シリーズで開催(JCA玉川と共催)
- ◇ おしゃべり広場開催(三茶しゃれなあど)

26期(2008年度):上野 一海・家木 範子

- ◇ 「JCAにほんご」パンフレットの内容をJCA千歳船橋、玉川の共用に内容改定
- ◇ 運営委員保管資料の保存期限を明確化し、保管資料のスリム化を促進
- ◇ 日本語教え方講習会を5と6月に4回シリーズで開催(JCA玉川と共催)
- ◇ おしゃべり広場開催(三茶しゃれなあどにて)136名参加

27期(2009年度):中川 英男・外山 高志

- ◇ ボランティア保険Bプラン(300円/1人)に、本部予算にて全会員加入

- ◇ 京王線沿線に教室開設の可能性について詳細な調査を実施（困難と判断）
- ◇ 日本語教え方講習会を5月と6月に4回シリーズで開催（JCA 玉川と共催）
新入会員は原則受講を義務化

- ◇ おしゃべり広場開催（梅ヶ丘パークホールにて）116名参加
- ◇ 世田谷区国際交流基金申請を検討（困難と判明）

28期（2010年度）：家木 範子・安藤 敬子

- ◇ 会計処理基準の変更
学習者会費配分比率を改定（本部 50%→30%、クラス 50%→70%）
クラス年度末残はクラス会計の次年度繰越を可に（クラス行事の充実化目的）
- ◇ ボランティア保険の継続及びプラン変更
東日本大震災の余震等を考慮し、震災対応のAプランに（600円/1人、本部費用）
- ◇ 運営委員会の体制変更
運営委員の負担軽減のため、2011年度より本部役員に書記担当を新設
役員選出手順を変更して、資格基準を曜日委員又はクラス会計委員経験者に変更（緩和）
日本語教え方講習会委員会を新設 日本語教え方ガイドブックを作成、各クラスに配布
- ◇ 日本語教え方講習会を5月と6月に4回シリーズで開催（JCA 玉川と共催）
- ◇ 外部へのJCA千歳船橋のアピール
在住外国人サポートのための、東京都との合同会議に参加
日本語教育大会（文化庁主催）などを積極的に聴講し研鑽
- ◇ おしゃべり広場（三茶しゃれなあどにて）170名参加

29期（2011年度）：安藤 敬子・宇野 公容

- ◇ 東日本大震災の影響で、学校施設使用クラスの教室が使えなくなりやむなく代替施設を使用
- ◇ ボランティア保険天災Aプランを継続
- ◇ 日本語教え方講習会を5月6月と10月に4回シリーズで開催（当年度より千歳船橋単独開催）
- ◇ 東京都の「東日本大震災時の状況調査」、「世田谷区役所国際課の職員研修」に参加し協力
- ◇ おしゃべり広場開催（三茶しゃれなあどにて）165名参加
- ◇ 学習希望者用JCA案内チラシの一部改定（教室の場所変更）

30期（2012年度）：宇野 公容・井上 宏一

- ◇ 本部会計の改善策検討（基準を変更）
会員のボランティア保険の団体加入を中止し、個人の任意加入に切り替え
学習者会費配分比率を改定（本部 30%→40%、クラス 70%→60%）
- ◇ 世田谷区の協力を得て、大震災の影響で関心の高まってきた防災教育を2教室で実施
- ◇ 東京都や世田谷区作成の防災関係資料、小冊子、パンフレットなどを学習者に配布
- ◇ 日本語教え方講習会を5月と6月に3回シリーズで開催
- ◇ おしゃべり広場開催（三茶しゃれなあどにて）146名参加
- ◇ JCA千歳船橋の30周年（次年度）への基本方針策定

JCA 千歳船橋のこれまでとこれから

宇野 公容（平成 22 年度会長）

JCA 千歳船橋は、1983 年わずか 4 人の有志が始めたボランティア団体である。今年はそれから 30 年、現在では会員・学習者を合わせると 200 人を超す大きな団体に成長した。ボランティアとして、営々と築いてきた 30 年という年月は貴重である。そこで、今春、かつての会長経験者、上野一海、中川英男、家木範子、安藤敬子の諸氏と平成 22 年度の会長、23 年度の井上宏一会長、中園公二副会長の 3 名を加え、この団体の過去及び現在について率直な意見交換を行った。これは、その際に出された意見を大略集約したものである。

我々は、問題意識を以下の 3 点にしぼり、話し合った。

- 1) JCA 千歳船橋の在り様の変化（会員、学習者も含め）
- 2) 組織体としての限界と可能性
- 3) 今後の在り様はどうあるべきか。

[1] JCA 千歳船橋の在り様の変化（会員、学習者も含め）

そもそも、この会が発足した当初は、在日外国人の日常生活支援という目的が中心であった。来日しても買い物さえ満足に出来ずにいた外国人の方々へ、会員が寄り添いお手伝いをするということから始まったと聞いている。それが現在では、学習者の置かれた環境やそれにとまなうニーズなどに大きな変化を来している。家庭の主婦はもちろん、留学生や一時的に滞在する者など多様化している。また、ニーズも N1 合格をめざす者から子どもの国語についていくために日本語を習得したという者までこれまた様々なニーズに支えられた JCA 千歳船橋であるといえる。上級に近い者から、まったく日本語を解さない者まで日本語の習得状況も多種多様である。

このような中で、日本語指導に関する研修や会員相互の話し合いによる研修など、会としてクラスとして現実的な対応を行ってきている。今後とも臨機応変な会員に対する研修機会のあり方の検討は必要なことであろう。

[2] 組織体としての限界と可能性

当初は 4 人から始まった組織も、今では会員が 100 人を超す大きな団体に育ってきている。当然、会員それぞれに組織に対するニーズや在り方への意見が異なってきている。例えば、従来から多いリタイア後の人生のエピローグとしてのボランティア活動を目指す会員がいる一方で、20 代や 30 代の若い人は、これからの人生経験のプロローグとしてのボランティア活動を目指している。また、前者の会員では、自身が高齢化したり、親や配偶者の介護に時間を取られたりしている。もともと、純粹のボランティア活動として加わった者同士であっても、そこには置かれた環境や年齢による意識の違い、ボランティア活動に対する考え方の違いが生まれてくるのは必然である。

そのため、毎年の役員選任を初めとする会の運営に大きな問題が生じてきた。つまり、役員のなり手がなかなか見つからないという現実である。各クラスでは毎年、役員選出に当たり大変な苦勞があると聞いている。そこで、この現実を打開するには、組織のスリム化や現在年に 6 回開催している曜

日委員会を半減するなど、抜本的な手を打つ必要に迫られている。また、もっと合理的な運営をめざし、あまり過去の実績にとらわれない現実打開の方策をめざすことの必要性が求められている。

また、恒例の「おしゃべり広場」のあり方についても、学習者の参加をもっと促すような方策が求められている。参加者の比率において、学習者の参加が会員の半数程度しかなく、会員中心の親睦会かと思ふような現実もある。学習者の中には、JCAの教室には日本語の習得が目的で来ており、それ以外の曜日に開催される催しには参加しないという学習者もいるのではないか。もっと学習者に魅力のある会合にする方法はないものかなど、基本的な問題点からする検討も課題の一つであろう。

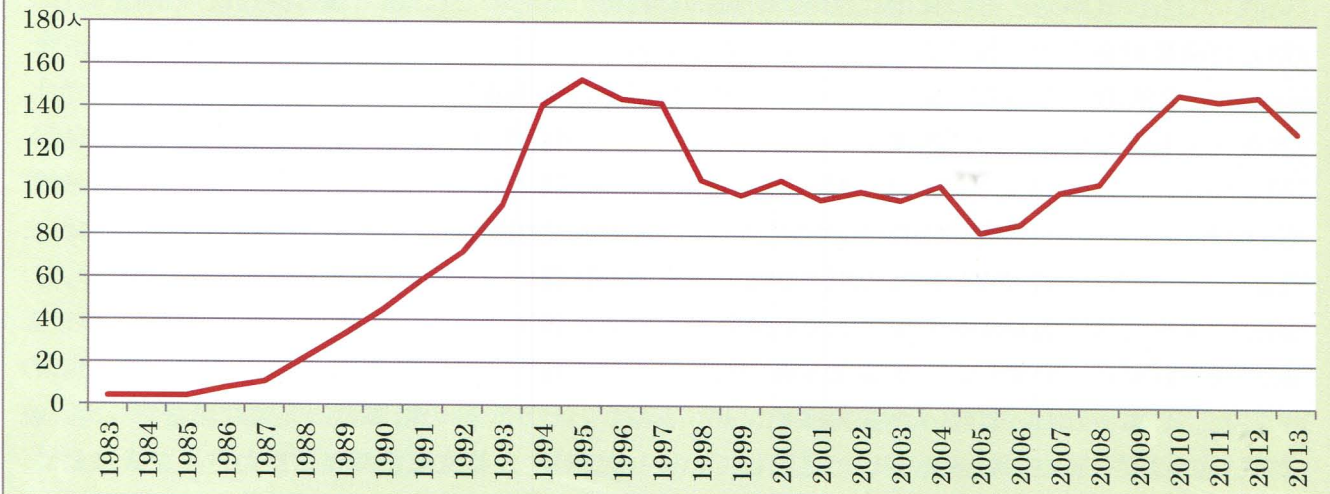
[3] 今後の在り様はどうあるべきか

在日外国人はこれからもますます増加するであろう。前述のように様々なニーズと層からなる外国人へ、来て学びたいとなるようなJCA千歳船橋はどうあるべきか。その点についての我々の検討はまだ不足しているように思う。とりあえずは、毎年の会員の日本語研修を基礎にして、日本語学習に力を入れる。同時にそのバックにある日本文化についても理解と認識を深めさせるような会のあり方をもっと検討すべきだろう。年中行事のお花見や七夕、クリスマス会などを通して、日本人のものの考え方や日常の振る舞いに至るまで、学習者への理解を深めさせるような方策をもっと考えていく必要はないだろうか。若い学習者にはアニメや漫画へのニーズは高い。今これへの対応をどうするかとなると、かなり現在の会員にはハードルが高そうだ。しかし、実際に日本への留学生の多くは、母国での日本文化認識がこのようなレベルにあることも事実である。歌にしても、歌謡曲しか知らない世代から見ると理解を越えた世界が広がり、若い学習者はそれを受け入れている。このように、日本文化を伝えるといっても、現実には多方面の知識や理解が求められている。

JCA千歳船橋のこれからの期待されている課題は多い。その課題解決に向かって、会員は学習者と共に歩んで行かねばならない。ますます、われわれ会員に課せられた問題は大きいといえる。



会員数の推移



私の思い出

ある学習者のこと

高崎 洋 月曜

(1995年入会)

十五年も前のお話です。その学習者は尹さんという韓国人で、日本に派遣されたお役人のご主人に従って高校生のお嬢さんと中学生の息子さんとともに日本に来られました。ご本人は梨花大学を卒業後高校の国語の先生をされておいでで、英語は勿論ドイツ語もお出来になる才媛でした。韓国で日本語も勉強されていて私との間は日本語と英語のチャンポンでした。尹さんがJCAにみえた目的は日本語を勉強するというよりも日本のことを知りたいためのようで、もっぱら尹さんが質問して私が答える形が多かったと思います。従って、少し経つと尹さんの頭にある日本人観が手に取るように分かるようになりました。尹さんが最初に驚いたのは、日本人は一人一人考えが違うということでした。これには私もびっくりしました。何言ってるの、当たり前じゃないか、というわけです。

江戸時代の風習が残っていれば知りたいというので銭湯を教えてあげたところ、お嬢さんと一緒に本当に銭湯に入って番台があるのでびっくりしたり、しているうちはまだいいのですが、戦争中日本の全ての小学校では天皇の銅像があり、子供達は毎日それを拝まされていた、と信じているのは問題でした。確かに銅像はあったが、それは二宮金次郎という男の子が薪を背負って歩きながら本を読んでいるもので、「どんな時でも勉強を忘れないで下さい」ということを子供たちに教えるためのものだ、と言いましたが信用しないので、図書館で二宮金次郎の銅像の写真をコピーして見せてようやく納得してもらいました。そのうち息子さんが柔道を習いはじめたりしているうちにだんだん日本のことが分かりかけたところで帰国されました。

最後に、帰国後また先生に復帰しますか、と聞いたところ「復帰はしない」との答えでした。在日二年のカルチャーショックは尹さんにはかなり大きかったようです。



JCAの感想と歴史の裏面の印象

芹澤 泉 月曜

(2000年入会)

JCAのお手伝いで私が学び感謝していることは、学習者のお蔭で日本語と日本文化の大切な事を遅れ馳せながら感得出来た事です。雑書の濫読をやめて内外の良書を読みたい気持ちが深くなりました。対面で外国人に接し、彼らが日本語の読み書きを習得することは大変な努力を要する事がよく認識出来ました。同時に、日本人であっても我々が日本語を読み、書き、話し、聞くことは誰も相当な努力をして習得してきたことが理解できました。日本に生まれ育った我々でも、日本語とその文化は自然に自動的に習得したのではなく、教えられ自らが意識して学んだ結果である事を私は学習者から教えられ感謝している次第です。

また、こんなことがありました。ドイツの工科大学の大学院で鋼鉄（フェルラムと言っていた）を専攻する学生が、ゾーリングゲンやシェフィールドの刃物以上に日本刀は切れ味が鋭いのは何故か話を聞きたいとJCAに来ました。私は日本に伝わる幾振りかの名刀の由来と、源氏重代の太刀髭霧丸の話をしたところ大変興味を示し、正宗の名刀を鍛える様な場所を是非見てみたいと切望されました。五か月後の帰国時、私は刀剣博物館と靖国神社に案内しました。以前靖国神社では日本刀の鍛造過程を実物により詳しく説明していましたが、この折には既に展示部屋は無くなり替りに日露戦争史を特集していました。詳細な写真と共に日本語と英語で日本が勝利した歴史を解説したものでした。日本人が白人に勝った事実はインド、トルコ、ビルマ等の指導者に多大な影響を与え、彼等民族の覚醒と独立の気運を促したと記していましたが、この英文を読んだとたんドイツ人は私に、ロシア人は白色人種ではありません、ロシアは東洋ですと叫んだので吃驚しました。然し帰りに気

づいたのは、ナチスがウクライナを占領した際永年ソ連を憎むウクライナ人は、ナチスを歓迎し共闘しようと提案したものの純血を誇るナチスはこれを峻拒し、此の事が敗因の一因となった歴史を思い出した次第ですが歴史の裏面を知る機会でした。



JCAに参加して

家木 範子 月曜/火曜
(2006年入会)

ある日の午後、我が家の電話が鳴りました。受話器をとると「先生、元気ですか？キムです！」と元気な声が飛び込んできました。私が JCA に入会した時、最初に担当した学習者です。

キムさんは、ご主人の転勤を機に日本の大学院に入り、大学が始まるまでの 2 カ月間の予定で、JCA に入会しました。しかし、大学が始まるとさまざまな問題が彼女を待ち受けていました。この為、彼女は JCA での勉強を継続する必要が出てきたのです。私の役割は大学教授を始めとする目上の人に対する日本社会での常識を教える事、日本語で提出する彼女のレポートの添削やプレゼンテーションのリハーサル等。週一回の教室の授業では足りず、メールで補う形をとりました。その彼女も急なご主人の転勤で半年後にソウルに戻っていきました。

その後、彼女は日本語や日本に関係のある事をしたいとの言葉どおり、日本語の観光ガイドの資格をとり、「ソウルに来たら、案内できますよ！」とか、「日本語を忘れないよういつか電話します！」と言ってくれています。彼女の電話をうけて「久しぶりに日本語を使ってみてどう？」と聞いた所、「仕事で日本語を使う機会があるけれど。敬語の使い方が難しいです！」という言葉が返ってきました。

“日本の思い出に”と彼女の娘さんに上げた小さなお雛様は毎年 2 月になると飾り、3 月 3 日を過ぎたら早めに片付けるそうです。「長くお雛様を飾ると縁遠くなる。」という日本の言い伝え通りに……。このようにキムさんから始まり、多くの国々の人達と共に勉強してきた年月は、私にとっての大きな財産となっています。



JCAの移り変わり

土田 和子 火曜
(1994年入会)

JCA の活動に参加するようになって、いつの間にか 20 年も経ちました。きっかけは 1992 年 4 月、朝日新聞に載った世田谷ボランティアセンターの国際交流の記事でした。直後から 100 件を超える問合せが殺到したとか。当時ボランティアセンターは小田急線千歳船橋にあり、私の住む地域でこんな活動が行われているのかと驚きました。日本語教師養成通信講座を受講した後、見学のつもりで午前の教室を訪ねました。曜日委員さんからいきなり「きょうは会員が足りないの、すぐやって！」といわれ台湾の女性と向かい合いました。今と違ってかなりアバウトでした、おおらかといいたいでしょうか。教室は狭く会員と学習者でぎっしり混みあっていて、細長い机に 2 組ずつ座ってのレッスンでした。韓国人の学習者が多く、私はよく韓国の方を担当しました。

2000 年 4 月に世田谷区で借りてくれていたマンションの契約期間終了に伴い、教室が笹原小学校、下北沢タウンホール地下会議室、北沢小学校へと目まぐるしく変わりました。この時曜日委員をしていたので、大変でした。長野会長が会場探しに奔走され、やっと各学校のご好意で PTA 室や児童が減って空いた教室を使わせていただくことができたのです。PTA が使う時や行事があるときは近くの区民会館を借りました。国際交流に理解のあった校長先生が 1 年後退職され、次に来られた校長先生からは使用を断られたり。学校に出入りするたび先生方や用務員さんにも気を遣いました。2002 年 12 月、ようやく完成した三軒茶屋の世田谷ボランティアセンターへまず水曜日教室が

移転、翌年4月に火曜教室も移りました。通うのが遠くなると渋っていた会員達たちも、新しい会場にほっとしたものです。学習者も会員も田園都市線沿線に次第に増えてきました。

あの時代のことを思い出すたび、今こうしてボランティアセンターの一室でのびのびと活動できることを感謝せずにいられません。せめて教室の会員の1人でも多くが「世田谷ボランティア協会をささえる会」に参加していただけたらという思いが致します。



JCAでの12年

山口 美沙子 火曜
(2001年入会)

私がJCAに入会したのは2001年です。それ以前に、主人の転勤でアメリカに滞在していた時そのYWCAで英語を教わりました。その時の印象がとても良かったので、私もそのような活動がしたいと思って始めたのが動機です。それからもう12年も経ってしまいました。回数にしてこの10月末で丁度430回の授業数になりました。担当した学習者は、韓国人・インド人・タイ人・バングラディッシュ人・日本人(中国からの帰国者)などです。

一番最初の韓国人の学習者には、自宅に呼んで頂いて韓国料理をご馳走になり、またキムチの作り方を教わりました。日本料理を覚えたいと言うので、私も自宅でちらし寿司や煮物などをご馳走しました。インド人にも他の韓国人にもお国料理をご馳走になりました。また一人の韓国人は、日本のパンの余りの美味しさに驚いた、韓国でパン屋さんをやりたいということで、N2の試験にも合格し見事パンの専門学校に入学できました。ご主人が韓国に帰国になっても、彼女と息子さんは日本に残り、それぞれ専門学校と中学を卒業できました。いまごろ韓国でパン屋さんをオープンできていると嬉しいのですが。

タイ人の学習者は2歳の子どもがいてなかなか出席できなかったもので、子どもを遊ばせながら学習出来るようにと、クラス委員さんが和室を借りて下さいました。そこで約6ヶ月学習したのですが、学習というより殆ど二人で子どもの面倒を見て終わりと言う日々でした。それでも学習日に母親と一緒にやって来ては「おばちゃん」と私の足に抱きつくようになって、私もいとしさが湧いてきていました。彼女は第2子が出来て辞めてしまいましたが。彼女だけではなく学習者にも色々事情があり、私もそれを理解した上で協力出来ることはして上げたいと思っております。



JCAからの贈り物

種橋 淑江 水曜
(1990年入会)

1990年初頭の頃でしたでしょうか、お昼少し前の教室から何ともいえず良いにおいが漂い始めました。ホットプレートが幾つかテーブルの上に並び、韓国の女性の方々が忙しそうに立ち働いていました。ホットプレートも様々なデザインや色が見られたことから各自が家庭から持ち寄ったのでしょうか。聞いて見ますと、その日は丁度韓国の「先生の日」だったそうで、私達会員は美味しいチジミを沢山ご馳走になりました。日頃は、ややもすれば日本語支援のことや日本文化の紹介ばかりを考えがちだった私は、このように自然な形で学習者からお国の文化の紹介を受けると、まさに国際交流の基本を教えられたように思ったものです。

当時、水曜昼教室の規模は現在の半分くらいでしたでしょうか。誰かが何かを提案すると、直ぐにまとまり、実行に移せる大きさでした。また、担当以外の学習者との交流も珍しいことではなく、ご自宅に招かれたり、偶にはお招きしたりと、教室以外でも学びあう機会がありました。本当によき時代であったと思います。

私はその頃、教科書を使ってはいましたが教え方はまったくの自己流でした。熱心な学習者を前

にして考えたことは、「外国人に分かり易い教え方」の修得でした。それには独学で身に付ける道もありましたが、敢えて学校に通うことを選択しました。様々な角度から「日本語について」や「教授法」などを学べたこと、更によき指導者や友人に恵まれたことは大きな収穫でした。当時から私が担当した学習者は、それほど多くはありませんでしたが、今でも時々連絡のある3人は私にとって特別印象深い方たちです。タイ国工業省の日本担当の女性公務員、縁あってドイツの方と結ばれ現在ミュンヘンで日本語学校の講師をしている日系3世のペルー人、子育てをしながら大学4年、修士課程2年を卒業し東京で働き始めた個性的な中国人女性。いずれの方もJCAの催しにはとても協力的で、勿論「おしゃべり広場」のスピーチにも積極的に参加をなさっています。それより何より嬉しいことは10年、20年経った今でも日本語を忘れず、日本語を生かした仕事をなさっていることです。

「ボランティア活動とは、助けるつもりが助けられ意外な展開が豊かな結果をもたらすもの」と言われていますが、私のボランティア活動もその例外ではなく、長きに亘りJCAからは数えきれないほどの豊かな贈り物をいただきました。この経験は今後も決して忘れることはないでしょう。JCAに感謝。(2013年9月退会)



五、七、五の形

浅野 由紀子 水昼

(1994年入会)

JCAは外国の方々の生活の手助けをしたいという思いを持った4人の先輩が始められた活動ということです。始めに生活の支援があり、それには言葉の勉強が必要だということで、だんだんと日本語を学ぶ

ことに重点がおかれるようになったようです。

私とその活動に参加させていただくようになって、早や20年近くになります。JCAの活動の中で日本語を教える事と共に、日本の文化、習慣、生活の仕方などを伝えるのも大切な活動のひとつだと思います。クラスでは、年に1~2回、ミニパーティーやお楽しみ会の企画として、節分、ひな祭り、七夕・・・など伝統的な年中行事に因んだものを紹介してきました。それは、私には、すでに縁遠くなっていた年中行事の由来を知り、意味を理解する機会になりました。

もう10年前になりますが、俳句を作ってみようという勉強をしました。いきなり俳句と言われても、学習者には無理な話です。学習者の見た風景や、感じた印象を聞き取りながら、会員と一緒に俳句(らしきもの)に纏めていきます。当時、私の担当していた学習者はデイヴィッドという10歳の少年でした。この少年はいたずら盛りの子で、勉強中に消しゴムをわざと床に落とし私の反応を楽しむような子で、勉強に集中させるのが大変でした。いよいよ俳句作りです。デイヴィッドが家族と海に行ったという事が分かり「海はどんな色でしたか」と聞きました。「ブルーグリーン」という言葉が返ってきました。この「ブルーグリーン」に私は感動を覚えました。私だったら、青い海、白い波というありきたりの言葉しか出てこないでしょう。

江の島の 海の広さよ あおみどり

というような句らしきものに纏めました。デイヴィッドと私の心の中に共通した風景が広がったということがとても楽しい思い出になりました。あのやんちゃな少年も今はきっと立派な青年になっている事でしょう。

この文を書いている今は秋です。

外国の 人の笑顔や 菊香る



クラスでの思い出

山内 章次 水夜
(2000年入会)

私は2000年(平成12年)1月からJCAの活動に参加しました。このクラスにいたサラリーマン時代の友人に誘われたのがきっかけでした。今年は30周年ですが、20周年の時は長野一美さんが会長で、私は会計を担当しておりました。JCA玉川と別組織にした年でした。この14年間に相手をした学習者は、9か国26人になります。水曜夜クラスは千歳船橋にある東京農大の留学生が7~8割を占めており、先輩が後輩を連れて来たり、寮と一緒にいった仲間同士で来たりしているようです。バイオテクノロジーの勉強に来ている人がほとんどのようです。

学習者と話をする時、なるべく政治的な話はしないで社会的な面や歴史的な話をするようにしています。東南アジアの方が主ですが、珍しくアフリカの人もいました。地中海沿岸のチュニジアの方で30歳くらいの社会人でした。チュニジアというのはその昔、ローマ時代のカルタゴだったところです。ジュリアス・シーザーが活躍するより100年くらい前、紀元前200年頃カルタゴの将軍ハンニバルが6万人の兵と象まで連れてアルプス山脈を越えてローマへ攻め込み、10年以上にわたってイタリア半島で転戦したという歴史の話に花が咲き、学習者は日本まで来てハンニバルの話が出来るととてもうれしいと大喜びをしていたのが印象に残っています。一方中国の人は孔子・孟子の話や、唐・明などの歴史の話は通じない人が多いです。学校の歴史教育が私の想像とはだいぶ違うようです。韓国の人でも政治同様歴史の話はしにくいです。そういう人たちは観光地や旅行を話題にしたりしています。1対1で相手のレベルに合わせて、内容を考えながら相手をするのは大変ですが、このJCAのやり方は、学習者にとっては有難い方法だと思っています。JCAの今後の地道な発展を祈っています。



千歳船橋教室での出会い

長野 一美 木昼
(1993年玉川教室で入会)

千歳船橋駅近くにあった世田谷ボランティアセンターの「千歳船橋教室」で初日に声をかけてくださったのは山口さん(初代会長)です。「雑居まつり」の準備を手伝わないかと誘ってくださり、羽根木公園で初対面の方々とわいわい楽しみました。気さくなお人柄で、JCA創設期の出来事や豊富な人生経験をいつも愉快地話してくださいました。

杉さん(1994年副会長、「電話案内」)に誘われて「千歳船橋教室」にも通い始めたのですが、その前に九品仏小学校が急に借りられなくなり、八幡小学校への移転と一緒に経験しました。教室移転を前提に曜日委員、続いて副会長に推してくださったのも杉さんで、気楽にやればいいのかと説得されてしまいました。成田さん(1999年2000年会長)からは「どんな人の意見も聞くように」ときつく申し渡され、衛藤さん(2000年副会長)からは段ボール箱2個分の書類を積まれ、1ページも漏らさず引き継ぎの説明を受けました。否応なく移転を実行しなければならない弱輩を案じてくださったのだと思います。同じ曜日だった小谷さん(1999年副会長)とよく教室の帰りに喫茶店に寄り、コーヒーを飲みながら熱く語り合いました。副会長時のご苦労も遠慮なく話してくださいました。

「電話案内」と曜日委員という関係から佐々木さん(初代広報委員、1995年1996年会長、のちに「電話案内」)とお話することが多くなりました。率直に苦言も含めて話してくださいました。2時間ぐらい電話で話したこともあります。JCAはもちろん外部の方々からも信頼が厚く、責任感の強い方でした。「電話案内」を託されたとき、なんの躊躇もなく当然のごとく引き受け今日に至っています。

JCAが「JCA千歳船橋」と「JCA玉川」に分かれる前、JCAの千歳船橋教室に籍を置くことが

でき、魅力ある方々と出会えたことは本当に幸運であったと思います。そして、JCA というすばらしい出会いの場を築き残して下さった先達のみなさんに心より感謝いたします。



JCA と私

星野 知子 木昼
(1998 年入会)

振り返ってみると JCA に初めて参加したのは千歳船橋の商店街の端に位置するマンションの 1F が事務所、2F が教室の世田谷ボランティアセンターでした。全教室がここを利用し活動していましたが、入会后短期間で移転の問題が起き、当時の役員さんの並々ならないご苦勞のお陰で全教室が笹原小学校に移転し、広々とした教室で学習が再開されたことを印象深く思い出します。反面、小学生の授業中や下校時に、外国人を含む会員が使用していたため、問題が起きないように気を使い、終了後はきれいに掃除等をして帰宅したことが記憶に今でも残っています。

当時は韓国人、フィリピン人、タイ人などの学習者が多く、担当していた韓国人の学習者が（友が友を呼ぶように）友人の学習者を呼び寄せ、賑やかな教室が展開されていました。小学校を使用した縁で「おしゃべり広場」を見学に来た若い女性の音楽の先生と学習者が親しくなり、音楽の授業に招かれ、韓国の歌を紹介し、共に歌う機会を与えられたことは良い思い出になったようです。その学習者は他の曜日にも通っており、1級の日本語能力試験に合格しました。今でも偶然街で会おうと、流暢な日本語で親しく話が出来る事はお互いにとっても嬉しいことです。

もう一人思い出す人はトルコからの学習者です。遠く離れた日本に身重な体で不安を抱えながらの来日でした。ご主人の大使館勤務のため日本に来、日本語がほとんど話せない状態でしたが辞書を手放すことなく勉強していました。この夫婦は日本を知ろうと積極的に行動もしており、日本人として好感がもてました。日本で出産しご主人より早めに帰国しましたが、今、どうしているかと時々、思い出される一人です。

これまで色々な人との出会いに恵まれたことは楽しい思い出として残っています。また、教えることや理解して貰うことの難しさを痛感しています。各教室が分散されましたが、それぞれの地域にあつて基本理念をもとに門戸を開いて、時代の要請に応じ活動が成されていくことを願っています。



文化交流の場—JCA

外山 高志 木夜
(2007 年入会)

私は 30 周年を迎える JCA に入会してから約 6 年、その間日本語授業の場が会の趣旨の一つである文化交流を行う場へと成熟してきた感があります。

各会員の日本語授業は老若男女、新旧、年齢を問わず会員の経歴や経験は多種多様でありながら、JCA 日本語教育の統一マニュアルなど無しに、学習者の国籍、年齢、性別、学歴、職歴、日本語のレベルに合わせて行い、さらに日本語授業を通じて、学習者に日本の日常生活、文化、社会などをさり気なく教える配慮を各自が行っています。それと同時に、学習者からはその出身国の文化、文明、社会情勢を学びとり、自身の知見の向上に資し、また学習者の考え方、お国柄にあつた教え方を研究しています。このように JCA は素晴らしいボランティア会員から構成された集団になっていると思います。学習者にとって JCA の授業は、在留、就学、在学、就職などとそれぞれ目的は異なるものの、安価で一对一の授業を受けられること、営利団体の日本語教室では学び得ない日本の教育、家庭、社会などのことまで個人的な相談に応じてもらえることなど、心の安らぎの場にもなっているのではないのでしょうか？

以前、副会長として全教室を見学しましたが、昼と夜、教室の所在地による学習者の構成要素は異なっていますが、授業が始まると各教室の雰囲気はまったく同じになったことは今も鮮烈な記憶として残っています。

今後 JCA のスピリットが、「ヨーコソ ジャパン」の先達として生かされるよう頑張らしましょう。

ドイツの美少女のこと

林 繁樹 木夜
(2009 年入会)

早いもので JCA に入会して 4 年を越えました(内 7 か月休会期間)。入会当日に担当を命じられたのは 12 才のドイツ人の少女でした。私の孫の年に近いがそれは美しい少女で、年甲斐もなく胸がときめきました。彼女は、両親はドイツ人、日本に来るまで幼少期はブラジルで生活、日本ではインターナショナルスクールで英語の授業、フランス語を習ったそうでした。日本語は週一回の家庭教師と JCA で習っているという 5 か国語を操ることができる強者でした。私は、日本語以外はほとんど駄目で、共通言語は拙い英語とほぼ半世紀前に少し齧ったドイツ語でした。発音はドイツ語の方が簡単なので偶にドイツ語を使ってみると、彼女から定冠詞を厳しく指摘されたりしたものです。しかし、彼女との週一回の楽しい JCA は突然終わりを告げることとなります。それは 2011.3.11 の東日本大震災でした。ドイツ政府は特別機を仕立てて在日ドイツ人の帰国を促しました。本社を名古屋や大阪に移転した企業もあったようです。別れの言葉を交わすこともなく彼女は私の前から忽然と消えてしまいました。もう、日本にはいないしこの原稿を見ることがないだろうから、名前を言ってもかまわないと思いますが、Lala Kohnlein(ララ・クンライン)と言います。ある日「先生、私に日本語の名前を下さい」と頼まれたことがありました。この嬉しい依頼を受け、硯(ララ)薫来(クンライ)と漢字を当てました。硯は宝石のように美しい石のことで、宝石のように美しいあなたが来ると、まるで爽やかな夏の風が吹いてくるようだ、と言う意味ですと説明したらとても喜んでくれました。今頃はドイツで美しい女性に成長し恋でもしているのでしょうか。彼女の幸せを遠くから祈っています。



「見ると聞く」では大違い

村岡 精一 金昼
(1995 年入会)

ある年のおしゃべりひろばでの韓国人学習者のスピーチを思い出します。その人は日本に来るとき、まわりの韓国の人々から、日本人はずるい、信用するな、日本人とは付き合うな、といろいろ言われたそうです。そんなものかな、とはじめは思っていたのですが、来てみたら全然違って、テキストを一緒に買いに行ってくれたり、子供が病気になって病院に連れてゆくとしたら、言葉が不自由で困るだろうと一緒に連れて行って世話してくれたそうです。スピーチの締めくくりでは「日本に来てみたら、韓国で聞いていたこととは全然違いました。私は近く帰国しますが、向こうでは、日本はあなたたちが考えているようなところではない、とはっきり伝えます」と言ってくれました。今も心に残るスピーチでした。



私は入会したとき、JCA の名称のうち C が culture の略だと知り、はじめはピンときませんでしたが、実際に活動してみてもわかりました。日本語を学ぶというのは、言葉がわかるだけでなく、日本人のものの考え方、価値観など、つまり culture を理解してもらうことで、この団体に相応しい名称だと感心しました。各国の間のトラブルでも、自分が直接得た知識・経験でなく、歪められた情報を鵜呑みにして必要以上にギャップを広げていることが多いように思います。さきに挙げた韓国人の話などもその例でしょう。

JCA では会員は日本語を教えると同時に日本人の culture を理解してもらい、反面、学習者を通じてその国のいろいろなことを沢山教えてもらって、相互理解を深めています。その意味で、他の国の実際の姿に接する機会をもてる JCA は国際理解に大きく貢献している組織だとつくづく思います。



JCA に育てられて

木村 徳子 金昼
(1993 年入会)

JCA が日本語ボランティアを始められて 30 年、地道な活動が続けられてきたことに敬意を表します。

数年後、といっても 20 年近くも前の話ですが、友人から誘われていながらも当時私は日本語学校で仕事をしていたため、なかなか入会できないでいました。軽い気持ちでというので、一度見学させてもらったのですが、「これは結構容易なことではないぞ！」というのが率直な感想でした。すでに日本語の講師をしていたので、それなりの経験はあったのですが、一つの環境の中で決められたカリキュラムに沿って日本語を教えることと、相手のニーズに応じて日本語を支援するという自分の立ち位置、日本語の知識の広さが求められるという違いを認識させられたからです。いわば日本語の百貨店でなければならぬ・・・と。

お相手する学習者が日本語の何を勉強したいのか、どんな日本語が必要なのかを考えながら、学習内容を決め、必要ならテキストを探すなど、改めて私自身の勉強をやり直してきました。それは少々厄介でもあり、また楽しみでもありました。

最初のタイの女性から現在の韓国女性まで、一緒に楽しく勉強した人はかぞえきれませんが、中にはお国柄、日本人として厳しい思いをしながら学習した男性のことも忘れられません。けれども、みんなその時の今を大事にして、日本語学習だけでなく、その国その人たちから沢山いただくものがありました。

あまり熱心な会員ではありませんが、歳をとってもまだ JCA から学ぶこと、楽しむことができそうです。



余生 18 年のつづき

西 敬史 金夜
(1995 年入会)

製紙関連会社一筋の勤めを終え、残りは何か人の役立つこと、JCA と沙漠緑化を選んだのが 1995 年、1 月が阪神大震災、3 月オウム真理教による地下鉄サリン事件のあった年である。沙漠緑化と言うと

即「どうなんだ、よく育っているのか？」とくるので先にこれから話すと、『沙漠緑化は私の道楽です』と言うことにしている。日本では「桃栗 3 年」だが現地・内蒙古では杏の開花が約 10 年、一昨年よりようやく果実が売れる程となった。

なにしろ、雨量は日本の 5 分の 1、どこまで掘っても砂、砂、砂の世界。しかし、来年は緑化 20 周年、村人がモンゴルの祭り「ナーダム」でもやろうと言ってくれている。

さて、私が JCA をなぜ選んだかと言うと、やはり旧満州で終戦を向かえ約一年後引揚げてきたことが大きいと思う。帆船で韓国の仁川に上陸ソウルで約 2 週間滞留したが、その時父と街に出かけ偶然だが韓国の紳士に声を掛けられ喫茶店で紅茶とコッペパンのご馳走を受けた。その紅茶の彩色、初めて食べたコッペパンの味、11 歳の時の体験だが決して忘れ難いものである。きっとこの紳士も日本人によくして貰い、そのお返しをしたのではないかと思う。こんな善意は是非続けなければ、と言う気持ちが常々私の中にあっただ。又、私が日本や日本人を外から見られる機会でもあったのだと思う。日本人は真面目、勤勉と評価されているが、それ以外にも礼儀、規律、思い遣りなどよいとこ

ろを沢山持っていると思う。しかし島国の性か、シャイで何か内に壁をつくっているところがある。特に知らない人にはである。これでは外国人には伝わらない。私は自分をもっとオープンにし、一人一人でよいかから日本の良いところを知って欲しいとJCAに入ったのであった。JCAで18年余り、再来年は80だが、一人でも日本の理解者をとの思いである。



インドネシア留学生との交流

井上 昇 金夜
(2010年入会)

金曜夜クラスは大半が経験3年以下という会員構成になっており、私も3年余りの会員です。ですからごく最近の思い出を紹介させていただきます。

2年前、私が担当したのはインドネシアの留学生2名でした。二人の希望もあって最初の半年間は日本経済の現状を紹介して欲しいというものでした。東京農大の学生さんでしたが授業ではそういう講義はないし、新聞、テレビでも理解するのが難しいと日頃思っていたそうです。次の半年間は日本の現代文化について紹介して欲しいという要望でした。伝統文化は彼らなりに理解したり体験したりしているものの「現在の日本人はどんな文化、風俗習慣、思想なのか」と言う意味です。硬いテーマなので私も当初戸惑いましたが、結局新聞記事をベースにして、経済も文化も日本とインドネシアとを対比させるような形で説明しました。彼らが興味を持って対話できるようにと工夫したのですが、むしろ私の方がインドネシアの国民のことをよく理解でき、勉強になったと思っています。

クラスの思い出としては、2年前のおしゃべり広場でインドネシア留学生4人によるクイズと合唱が印象的でした。スクリーンを使ってのクイズ形式でインドネシアの紹介をした後、インドネシア国民の一番の愛唱歌「インドネシア プサカ」をギター演奏を交えて4人全員で歌い上げました。会場の皆さんからは、クイズに掛け合いでのご協力をいただき、合唱では他のクラスのインドネシアの学習者の飛び入り参加もあってたいへん盛りあがったことを覚えています。実は発表に向けての準備を会員の皆さんで計画していたのですがそのスケジュールにのってこず皆やきもきしていたのですが、本番はバッチリでした。最後に諸先輩の皆様の築き上げられたJCAの発展に私たちも未熟ながら頑張りたいと思います。



JCA 千歳船橋グループの教室

曜日	時間	場所		最寄り駅
月	10:00 ~ 11:30	代田ボランティアビューロー		世田谷代田
火	10:00 ~ 11:30	世田谷ボランティアセンター		三軒茶屋
水	10:00 ~ 11:30	世田谷ボランティアセンター		三軒茶屋
水(夜)	19:00 ~ 20:30	明正小学校、または 砧総合支所		成城学園前
木	14:00 ~ 15:30	代田ボランティアビューロー		世田谷代田
木(夜)	19:00 ~ 20:30	代田ボランティアビューロー		世田谷代田
金	10:00 ~ 11:30	砧図書館	成城学園前、または 祖師ヶ谷大蔵	
金(夜)	19:00 ~ 20:30	桜丘区民センター・千歳台地区会館		千歳船橋

編集後記

JCA 創立 30 周年に当たる 2013 年度に、編集作業のような仕事の経験や知識もない私が、不本意ながら広報を担当することになってしまいました。何はともあれやるしかないと心に決め、まず目的を明確にすることから始めました。その 1、現会員はもちろん 40 周年、50 周年と後に続く会員の皆様に、私たちが行ってきたことが正確に伝わるように記録を残しておく。その 2、2013 年度のこの時の JCA を構成する会員やクラスの様子を伝える。この 2 点に絞りました。

前者につきましては、これまでの記録を丹念に読んで調べいくのですが、記録の仕方が統一されていない為、残されていない部分があったり意味が分かりにくかったりしていて、正確さを求めて検証する作業に思わぬ時間がかかりました。後者につきましては、長く活動を続けていらっしゃる一人でも多くの方に思い出を寄せていただきたい、またあまり負担にならないようにと原稿を短めをお願いしましたが、皆様多くの思い出をお持ちで短く纏めるほうが難しい作業のようでした。存分に語っていただけなかったことを、残念であり申し訳なく思っています。

先達の足跡を振り返り、皆様方それぞれが新たなお気持ちで 31 年目のスタートを切っていただくきっかけになりましたら幸いです。

広報担当（運営委員）：影山 蓉子



Japan
Culture
Association